

令和6年度第3回 立川市文化振興推進委員会 会議録

開催日時	令和6年10月29日（火曜日） 午後1時～3時
開催場所	たましんR I S U R Uホール（立川市市民会館） 5階 第2会議室
次第	1. 協議 （1） 立川市第5次文化振興計画骨子案について 2. その他
配布資料	資料1 第5次文化振興計画骨子案について 資料2 第5次文化振興計画骨子案 資料3 文化振興計画新旧対照表 資料4 4つの取組方針と重点手法のイメージ図 資料5 立川市文化振興推進委員会委員名簿
出席者（敬称略）	[委員] 委員長 今井良朗、副委員長 瀧川淳、 宇治康、小林優貴、鈴木美智子、高木誠、成清北斗、堀江けんいち、松寄ゆかり、 三浦康浩 [事務局] 産業文化スポーツ部長 井上隆一、地域文化課長 轟誠悟、市史編さん室長 齋藤安則、地域文化振興財団事務局長 足立香織、地域文化振興財団事務局次長 浅沼宏、地域文化課文化振興係長 稲福秀哉
公開及び非公開	公開
傍聴者数	0人
会議結果	・立川市第5次文化振興計画骨子案について協議を行った。 ・重点手法について協議を行った。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話 042 - 506 - 0012

■会議内容（要旨）

- ・事務局より、資料の確認・説明があった。

1. 協議

課長：これより文化振興推進委員会を始めたいと思います。それでは開会に先立ちまして委員長よりご挨拶をお願いいたします。

委員長：本日はお忙しいところありがとうございます。（委員長挨拶）今日はどうぞよろしくお願いいたします。それでは事務局の方、お願いいたします。

課長：今日はお忙しいところありがとうございます。まず資料の確認からお願いいたします。事前に配布した資料が、資料1から3と机上配布した資料4と5です。資料4につきまして4つの取り組み方針と重点手法の関係をイメージしたものです。また資料5につきましては、協議終了後その他でご説明をしたいと思います。では委員長よりよろしくお願いいたします。

委員長：本日は第5次文化振興計画の骨子案について協議したいと思います。どうぞお願いいたします。それでは資料の説明をよろしくお願いいたします。

課長：では第5次文化振興計画骨子案につきまして、担当の文化振興係長より説明させていただきます。

（文化振興係長より、骨子案の説明があった）

委員長：骨子案についてご説明いただきました。まずは資料につきまして、何か質問などございましたら先にお願ひします。大分、表示の仕方が変わりましたので、そのことを含めてご確認の上ちょっとこの辺りというのはありましたら、伺いたいと思います。いかがでしょうか。第4次文化振興計画に比べますと、かなりスリムになった感じがあると思います。それとこれまで議論されてきたことがかなり反映されています。尚且つ、そろそろ目的とか、次に、ということではなくて、具体的にこういきますよという、そういう段階に入ってきたのが今回の骨子案になっているのかなという風に思います。そういう意味では、これに次回の委員会で更に文言が加わり、最終的には1つの冊子として表されるのですから、ここはかなり重要な部分です。ぜひ何か、質問に限らず、意見などもございましたら併せてお願いいたします。

A委員：先程の説明の中にもあったウェルビーイングという概念、それがやはり面白いなと思います。これから色々肉付けされるという事ですけれども、非常に期待をしております。それで、この資料4の全体のイメージ図に重点手法として3点掲げられていますが、それぞれ中身が違うというか、次元が違うという事なので、整理する意味でこの中身の事をお伺いしたいです。「多様な主体との協働」というのが多分中心にくると思うのですが、この「デジタルテクノロジーの活用」というのは本当にツールとしてどうこうということなので、重い軽いということで比べると変な話ですが、またちょっと違う事なので、その辺がどういう風に整理されるのかということ。あと「地域文化振興財団との連携強化」という

のは、今までも十分されてきたと思うのですが、今度あえて柱として建てる「連携強化」というのは、何か違う観点からの強化なのかなとイメージして捉えていたのですが、その辺のことを少し補足というか、ご説明いただきたいです。

委員長：いかがでしょうか。

課長：確かに、こちらの重点手法の方はどの取り組みにおいても、検討するツールという形のものになっています。文言としましてはデジタルテクノロジーという、いわゆるデジタルの色々なものを使う、正にツールというような感覚であります。またその一方で「多様な主体との協働」というところも、考え方としましては、色々な芸術活動団体同士が結びつく事により、新たに生まれるものというもので、そういう中では一つの手法というか、あとで使う言い方をさせていただきますけれど、いかにネットワークを繋げるかとかそういうところになっていると考えております。また「財団との連携強化」というところですが、これは今までも財団が文化振興の中心的な役割を担うというところで、これまでも積極的に果たしているというところはあると思いますが、更に立川における文化振興の中での中心的な役割というのを深化させるというか、連携を図っていきたい、いくべきだという思いがありましたので、今回改めて重点手法というような形で書きました。以上です。

委員長：いかがでしょうか。

A委員：「多様な主体との協働」という事でもう少し踏み込んでお伺いしたいのですが、現在行われている色々なイベントや、活動においてもどこが主体になっているのかな、というものが色々あると思うのです。身近なところで、今月（10月）の初めだと思うのですが、柴崎学習館で柴崎町文化祭という色々な団体が発表会というか、それこそ保育園の園児から結構年配の方まで、フラダンスだったり、展示であったりとかを披露していました。立川市内の色々なエリアでやっていると思います。例えば富士見町だったら滝ノ上会館でやっているとか。それは市民が主体になっていることがとてもわかりやすいのです。あとはもう少し大きなことになってくると企業が協賛金を色々中心となってやられているとか。この柱となってる「多様な主体との協働」をこれからもっと、深掘りするのか広げていくのか分かりませんが、この辺の考え方というのは、新たなものが加わるのでしょうか？

課長：それは模索をしているところです。今年度立川文化芸術のまちづくり協議会におきまして、文化芸術団体を集めて対話を行うダイアログというものを開催しました。それを行ったところ、市民団体から、自分達の活動は見えるのでわかっているけれども、他で活動している人と話す場がなかったという事で、更に連携を図れるのではないかと、会議が終わった後も、話し合いなどが行われてるという状況です。それを踏まえまして今後は、市内で活動されている方々を繋ぐということによって新たな文化振興が担えるのではないかと、いう事を感じているところです。それもありまして今回の対話主体の協働というところでは、まずはネットワークで繋げるということも行っていくべきではないかと考えております。

A委員：よくわかりました、ありがとうございます。主体といわれているものは、今まで色々なインフォメーションの中でクレジットとしては入ってはいるのですが、市民からするとどこ

が主体となってやっているのかということが今ひとつわからないという側面も多分あると思うのです。せっかくこういう視点で整理されていくのだとしたら、本当の主体というものをもっと表に出てくるやり方があってもよいのではないかなと。具体的にじゃあどうということなのかということがうまく説明できないので恐縮なのですが。こういう、取り組みであったり催し物であったり、色々なものが、主体となっているのはどこかというのが、よりクリアに、際立ってくると、市民の皆さんがじゃあ参加してみようかなと思うというか。どう言ったらいいのでしょうか。この、色々な取り組み方針の中にもっと、例えば楽しむという観点で、親しみがわくとか、ハードルが下がるとか、そんな付加価値が広がっていくのではないかなという、抽象的で恐縮なのですが。主体が明らかになっていくといいなという思いです。

課長：方向性が間違っていたら恐縮ですが、立川いったい音楽まつりというのが毎年5月に行われていまして、こちらは立川いったい音楽まつり実行委員会が主体として動いています。ある程度ボランティアとして参加していただけるスタッフを募集しておりまして、ここがしっかり明確に分かっていると、それに向けて参加している姿もあります。今A委員がおっしゃるように、行っている主体というのがわかるとそれに対して自分も一緒に参加してみようと、何か募集があれば応募してみようというきっかけになる。そのためには主体をどこが行っているのかがよりわかることが良いのかなと感じました。そのようなことですかね。

A委員：おっしゃる通りです。

課長：どこが主体として行っているかがわかれば、そこでまた市民も参加しやすいので、いい事例として立川いったい音楽まつり実行委員が挙げられるのではないかと考えております。そこを参考にしながら検討していきたいと思います。

委員長：いずれにしてもこの3点は大きな概念という風に受け止めていました。これまで議論されてきた事を集約して、これを大概概念として置いたら、こういう文言になる。これまでそれが目的という形であったのを、むしろ手法だということで敢えてここでは非常に抽象的であっても、大概概念として、この下に多様な主体、企業も大学もそれから様々な団体、色々なものがそこにある。あまり最初からそこを具体化してしまうとそれだけかということもありますから、これは大概概念ということでいいのかなと思います。むしろ今度は、文言化されて出てくるわけですから、その段階で具体的に例えばこういうものなのだということが見えるような、そういう形になってくれれば良いのかなという気はします。これまではその個別の概念が頭にきていて、それが目的ということになってましたから。むしろこのくらい大きな概念にしておいて、そこに次があって、そのさらに下は皆さんで考えましょうよ、と。そのくらいの形で今回提案ができるようなものだったら、それはそれで一つの新しい方向性かなとは思いますが。このデジタルテクノロジーに関しても、これにはGさんがなさってるようなことも全部含まれていきますし、それから市史編さん室の中ではデジタルアーカイブをどういう風に活用していくのかとか、あるいはどうするのかとか。そういうようなことが全部ここに入ってくる。ですから具体的にそういうものが、次回に文

言として見えてくればいいのかなという気がします。それから地域文化振興財団との連携強化も、この委員会の場にずっと出てきた意見です。やはりここを強化することによって、「立川ならではの財団」の活動、日本中どこにでも「財団という組織」がある訳ですから、立川はここが違うぞというそういうものが明確に出るし、尚且つ強化するということは人材もそうだし予算もそうだし、そういうところに繋がっていくのかなと思います。

部長：補足というか。A委員の質問の中でいろいろ疑問点をご提示いただきました。まさに我々がそこを目指すというところについてのご質問でした。その点は委員長がほぼ、おまとめくださいますありがとうございます。その中で地域文化振興財団との連携、なぜにあえて出てきたのかということは、委員長がおっしゃったことに付け加えてまして、私ども地域文化振興財団だけではなくて、行政の面では地域文化課、それと生涯学習推進センター。先程のお話で出てきた、柴崎学習館など地域の学習館を所管しているのが生涯学習推進センターでございます。市民の目線では3者が同じようなことをやっているように見える。そのように見えるということは、いったいこの事業はどこがどうやって統括しているのかとか、正に主体がもっと前面に出てくればいいのに、ということになります。ですので、今財団と地域文化課、生涯学習推進センター、関係3課で、委員会といいますか、どういう風にこれから文化芸術というところの役割分担をしていくのか、ということをお話し合っております。例えば生涯学習推進センターは本当に文化芸術の入口のところ、座学を中心に入口のところをまずは学んでいただく。そして、学んだことを実践する場というのが、それが財団などのステージ事業のところ。あるいは計画的なところ、全体を取りまとめるところが地域文化課である。そういう風に役割分担をしっかりと、市民の方にもっと見える化をした方がいいのではないか、というような意見が出てきてるところです。その中であえてここに「地域文化振興財団との連携」というように書きましたのは、実動としてやはり文化芸術をもう少し周知するのに、主体的に動いていくのが財団であろうと思うからです。委員長からも先程色々ご意見をいただいたところであります。ここで第5次文化振興計画のところであえてこのように示すところによりまして、より明確化しようという意図を含んでいる、ということでご理解いただけるとありがたいかなと思います。

委員長：とてもよくわかりました。地域文化課という行政が窓口になると難しいところが、財団が間に入るだけでも俄然変わる場合もあります。ですからその連携がうまく繋がっていつて、誰もが親しみやすく、行って相談もできる、そういう関係ができるといいですね。

B委員：財団と提携できたらいいのだけど、財団も興行的なことをやっていますから。そして、管理もやっている。今回我々は計画立てるだけで、具体的な現場のそういうところは、これから市の方でやると思うのだけでも、実際問題、財団の中でも手に余るようなことはないかなと思いました。興行的なことやらないといけないし、市民相談というのも、例えば芸術関係は財団が前面に立ってやることになるのかなと。市の方でもそういう窓口はないのかと思うのです。そういう具体的な現場の立ち位置というようなものが、わかりにくいというか。地域文化課が属している部はスポーツもやっているし、産業もやっていますよ

ね。産業と経済と芸術もというのは大変だとは思ひ、人材的にも色々大変だと思うのですけれども。もう少し市民に分かりやすいように具体的に、例えばアーツカウンシルをやるにしても、東京都の場合はアーツカウンシルがちゃんと個別の部門としてあって、僕も相談に行ったことがあります。市の方はそういう窓口が市民にも分かりやすいようになるのでしょうか。そういうのをやっていただければと思います。

部長：B委員がおっしゃったことはその通りです。我々目指すところはそこです。アーツカウンシルというところは、それこそ助成金を出したり、文化芸術の企画・計画を立てたり、相談窓口になったりという様々なことを受ける窓口ではございます。ですが、B委員が今おっしゃったように、今の財団の体制でそれが全部できるのかというと、それは難しいで

す。ですので、まずはここでうたうことによって、その礎を作っていこうということでございます。行政側も今後は財団がそういう体制を整えられるように、人的なことなのか予算的なことなのかあるいは取り巻く様々な主体なのか。そういうことを含めて、この5年間、計画の中で検討していこうではないかということの現れということでございます。それを目指す方向でのまずは第一歩とお考えいただければありがたいと思っております。

B委員：よろしくお願いします。

委員長：画期的なことだと思います。市からこれが出てくる訳ですから。これは財団が希望しているのではないですよ。市が強化しますと言っている以上は、人材も予算もそれなりにこれから検討しますよということでもある訳です。それが本当に実現していけば、具体的にやっぱり理想的な本来のアーツカウンシルに近い形態ができていくのだろうということです。ですからそういう風になった時にこれまでの様々な計画がやっと第5次文化振興計画まで進んでいく、これの実現というか、本当に形になっていく、そういう状態にもなるのかなという気がします。ですから市が覚悟を持っていますというのは心強いのではないのでしょうか。

A委員：今のお話の続きで、ちょっとひねくれた言い方をすると、市の全体構想というのは、どうしても合理性だとか経済的な問題だとか、そういうことが優先されますよね。ところが一方文化振興というベクトルはそれと多分矛盾する方向になるということが、往々にしてあると思うのです。コロナ禍においてライブイベントなどが中止になるなどして色々な影響があって、飲み食いと比較すればやはり優先度は低いということで、おぎなりにされるということがありました。ですからこの文化振興というベクトルを本当に守っていくという時には、おそらく市が全体的に推進する限られた予算の中でという錦の御旗を振りかざされた時に、どこまで守れるかという覚悟みたいなものをどこか持っていないと、せっかく積み上げてきたものが一瞬にして瓦解するということが多分あると思うのです。盛り込まれるかどうかは別にして、ある種の聖域というか、何かヘッジのつけ方というのは有りや無しやというか。他の自治体はどうしているかわかりませんが、そのような視点も必要なのかなという気がしました。

委員長：そうですね。他にご意見などありませんか。Cさんいかがでしょうか。

C委員：私もこれから財団が核となって、アーツカウンシルのような形になっていくことはすごくいいことだなと思います。私自身アール・ブリュットを運営するにあたって、前半の方は東京都のアーツカウンシルの方から助成金を4・5年ぐらいいただいていました。やっぱり、そこにお伺いしてサポートも受けながらやるという時の安心感などがありましたので、立川でも是非そういった形になっていくとすごくいいなという風に思っています。先程A委員がおっしゃっていたように、私もこれを見た時に、デジタルと多様性と地域文化振興財団という柱が同じステージにあることがすごく違和感があったのですが、説明を聞いて納得することができました。たぶんこれから主体となる協働や、アーツカウンシルになる財団、どういう風にこれからの時代デジタル的な発信をしていくかということ。どれもすごく大事だし、これからこの多様性になったものを、どのようにまとめて、入口は1つにしておくけれども、その入口がわかりやすく、みんなが選び易い、市民の皆さんに分かりやすく発信するということがものすごく大事なんだろうなという風に思っています。たぶん私達にとってはすごく身近でよくわかるけど、さきほど部長さんがおっしゃってた様に、生涯学習推進センターがやっていることと地域文化課がやっていることは、一般の市民の方ってどっちがどっちのものなのというような感覚があると思うのです。だから、生涯学習の入口から入っても、財団があってその先に繋がっていく。文化芸術というのは本当にないがしろにされがちな部分がありますが、世界的にもすごく発展してる街は全て文化芸術がとっても豊かなところですよ。文化芸術が豊かな街というのがやはり、絶対、ものすごく一番大事な部分だと、私もそれを信じて活動しています。ですので、そこは大事だということを皆さんに分かっていただけるような発信ができるといいかなという風に思っています。

委員長：文化芸術にお金を出している国、行政というのはちゃんと伸びるのですよね。そこに必ず教育がついていく。そうすると次の未来が見えてくる。このところ、日本の様々なところで、行政もそうですけれども、限られた予算しかない、予算がないから削るところは文化芸術です、と本当にまともに言ってくる訳です。それでは中々文化芸術は育たないし、教育もうまくいかなくなる。ひいては子ども達も良い環境の中で育たないという。こういう悪循環に陥ることをどうやって避けるかということが、こういう中で議論されていくことがとても重要な部分なんだなと思います。

D委員：この第5次文化振興計画、資料3を読ませていただいて、私個人的にはとても見やすく、次第にどんどん細くなるのですけれども、一般市民に対してもすごく見やすいなというのを感じました。今日のことから外れてしまうかもしれませんが、先日、立川市と国立音大と立飛の3者が協賛で、グリーンスプリングスのホールで国立音大の演奏会というのがありまして、私も参加しました。それを見るにあたっては配信で申し込むのですけれども、立川市民の方を優先していただいたというのが非常に嬉しかったです。無料というのは、立川市民でよかったなと思いました。以前別の自治体に住んでいた時は、新日本フィルの活動を自治体が支援していたので、無料ではないのですけれども割引で鑑賞できる特典があったのですけれども、今回立川でもこういったイベントがあったので、すごいな

あと、感動しました。こういう文化振興推進委員会のような集まりがあって、それでその力かなあと思ったのです。小さいお子さんからお年寄りまでいっぱい来ていて、3階席なども途中で開けていたので、予定よりも多くの人が集まったのかなあというように感じました。ああいうイベントはよかったなと思いました。

委員長：Eさんいかがですか。

E委員：前回の議事録を拝見して、やはり今回の計画がいかにウェルビーイングに繋がっていくかという視点がすごく重要だということを認識しました。その中で1番の「ふれる、たのしむ」の中に本文中に考え方を取り入れるというお話がありました。自分がイメージしたのは、全体の計画に取り組むことによって、市民の方々のウェルビーイングに繋がるというイメージでしたので、1番だけではなくて全部にかかってくるのではないかなと、個人的には思いました。そこでいかにウェルビーイングに繋がるのか等を解説することが、やはりこの計画に対する共感を市民の方にもたらしめるのではないかと個人的には思いました。

委員長：そうですね、ウェルビーイングという文言が最初に、正に始めるというようなところになるのだと思います。そこへ全部集約されていく、そういう形で全体が計画されているということで理解できますね。

課長：書き方につきまして今のご意見も踏まえながら、事務局の方で整理してみたいと思います。

F委員：この「つたえる、とどける」という所の、デジタルアーカイブ化ですが、それをどこかに周知をして見せていくこと、みんなに知ってもらえる機会はあるのかな、と思いました。このデジタルテクノロジー活用というところですよ。折角のアーカイブ化も見てもらわないと。それがシティプロモーションの展開ということになるのでしょうか。

委員長：これに関してはデジタルテクノロジーの活用というところで、この骨子案を作るにあたってイメージされたことを、もう少し事務局にお話いただいた方がいいかもしれないですね。

課長：いったん議論の中で出てきたところを説明させていただきます。市史編さん事業や文化財などの領域で、それらをデジタルアーカイブ化していくことを、色々な自治体でも検討している話がありました。立川においても、デジタルアーカイブについての検討を進めていかなければいけないという思いもあり、1つのデジタルテクノロジーの活用の手法を用いながらというようなものかというように思っているところです。また別のものといましては、ファーレ立川アートにつきまして、今現在の姿というところは109点、パブリックアートは30年間続いているような状況ではございます。ただあちらにつきまして、都市機能のアート化をした部分というところがありまして、街灯であったりベンチであったり、また、ビルの換気口を覆うようなアート作品など色々なものがございます。そうしますと街全体が30年、今までは同じような姿であります、今後もそのまま続くのかというと、街も変化をしていくもの。そうするとアート自体も変化をする可能性があるものになっています。その中で現時点の姿をいかに残すのかというところが大きな課題の1つになっていまして、そこを今後デジタルテクノロジーを活用した形で現存の姿を残す

ことが、今の時点で大事ではないかと意見もありまして、そのようなイメージを持っていたところです。今、F委員がおっしゃったように、周知活動というところですが、これについてはこれまでも色々ご意見をいただいています。しかし、なかなか効果的な発信が難しいところです。今ホームページやSNSなどの活用ができる中で、立川観光コンベンション協会のようなところのご協力をいただきながら、情報集約することによって、立川市の中での一元的な発信というものも進めていかなければならないと思っております。F委員がおっしゃったように、今あるものの情報をいかに発信するかというところについては、もちろんこちらもデジタルテクノロジーの活用という中では行っていかなければいけないという風に思っております。今までそこところは議論として検討したところはありません。本来はもっと取り組みを進める中で、新しい技術というものもございますから、そこらもいかに活用するか、できるかというものも検討していくことになるかと思えます。それ以上深い検討はまだできていないのが現状になります。

委員長：いずれにしても、3つの柱というのは横にも繋がっていることになりますね。

課長：どの取り組みに対しても、取り組む上でそれが活用できないのかというところは1つのツールとして検討することになります。

委員長：ですからデータといってもアーカイブの問題もありますが、発信の問題等もある。色々な形がありますでしょうし。ファールなどもデジタル化したものをどうやって見るのか。あるいは現物をどうするのかというような全体の話にまた絡んでくる。たまたまですが、今日会議が始まる前に市史編さん室の顔見知りの職員から色々と質問をされました。市史編さん事業の中でデジタル化をするにあたって色々悩んでるので、意見を、と訊かれました。データアーカイブ化すると言っても、誰がやるのか、どうやってやるのか、というように色々な問題があるのです。その時も僕が色々と答えたのは、まず基本は現存する紙資料は絶対捨てては駄目ですよ、という話です。1回デジタル化したらそれはもう全部いらないなんて思ったら大きな間違いで、最終的にはこれしか残らないから、と。また、データ化をしたものも、信頼しないで必ずバックアップを取りながらずっと継続していく事が必要です。それとそのアーカイブを作っていく場合も色々な手法があって、いかに効率よく、かつ安くやるかということを考えなくてはいけない。そのためには色々なやり方を検討して、そこから入ればいい。僕はそういう時に小さなコンパクトなスキャナー、A4くらいなら20枚くらい一気に両面すぐスキャンできる、そういうものがあるんですよ。結構安いのです。で、そういうものを効率よく使う事も出来るし、スキャンが難しいものは外注する。自分たちでできるものは自分たちでやる。そういうような色々な工夫を、そろそろ検討されていくといいのではないですかと、さっきそのように話をしていたのです。やはりある程度そういうものをイメージしたら、具体的にどうするかという検討を現場のところで考えていくべきだろうな、という気がします。この辺りはGさんからご意見をお願いいたします。

G委員：デジタルテクノロジーの活用はすごく広いので、色々、難しくはないと思うのですが、絶対取り込んでいけないといけないものだと確かに思います。今回の中で一

番、僕がこれも重点の中に入れた方が良いような気がする点が、地域文化コーディネーターの検討・設置。この、個人なのか、団体なのか複数名なのかまだ確定していませんが、こういう人がたぶん上の色々なものを繋げたりとか、各団体を巻き込んでみたりとかする。結局デジタルテクノロジーの活用をしましょうってその人たちがみんな下準備をやってくれればいいと思います。例えば研修会とかインスタの講座とか色々、そういうものとかを開いてもらおうとか。そういう人が立川にいと、何かこういうものをうまく繋ぎあわせられるのかなっていう気がしました。人が個人を指すのかまだわからないですけど、役割はすごく大きいのかなと思いました。あと、ウェルビーイングの視点を取り入れるというのはすごく素晴らしいなと思っています。その上で視点を取り入れたことをちゃんと伝えないといけないのかなということを考えていくと、立川ならではのウェルビーイングというのは何か、文化振興というのはどういうことなのか、ともう少し具体化していかないといけない。ちゃんと改めて勉強しないといけないと思うのですが、たぶんウェルビーイングというのは、そういう「文化・アートの中でのウェルビーイング」を立川らしく、作っていかないといけないものなのだろうなと考えています。その辺を考えていくと、それを取り込んだコンセプトとかキャッチコピーなのか、みんながそこに向かって、同じ方向に向かっていけるような、何かそういう発信するコピーみたいなものがあるのかなと感じました。

課長：そうですね。仮称として置かせていただきましたが、今出ました地域文化コーディネーター、これは今までのこちらの委員会の中で答申のような中で触れるかという事の話がございましたが、一旦ここで主な取り組みの1つとして書くべきだと考えているところです。こちらにつきましても実は、私が描いたコーディネーターと、部長が思い描いたコーディネーターと、係長が思い描いたコーディネーターというものが、実際はまだちょっとイメージが違うところがありまして、より立川にとって必要なコーディネーターがどういうものなのかというのが、議論をしていかなければいけないと事務局として感じているところです。例えば立川の大きな文化芸術の方向性というところをディレクションするような感じでのコーディネーターなのか、今G委員もおっしゃったような、各地域で行われているような文化芸術を繋げるようなコーディネーターなのか、課題解決のコーディネーターというものもあるかと思います。また例えば福祉分野ですと、地域福祉コーディネーターという形で、市内6つの圏域に分けて、それぞれに地域福祉コーディネーターという方が置かれて、中での課題解決をしてるような姿もあります。コーディネーターという言葉だけにしてしまいますと本当に幅が広くて、ここをもっと、立川にとって何が望ましいものなのかというような検討をしていく事が重要かと思っております。またG委員がおっしゃったように、立川にとってそういう繋げる役割として非常に重要な存在になっていのかと、委員の皆さんの議論を踏まえて感じてはいますが、それがまだ明確な答えをしておらず、どれが正解なのか、今後議論していきたいと思っています。またもう1点頂きましたウェルビーイングの視点ですね。こちらを市民にまた伝えていくということで、書きぶりをもう少し検討しなければいけないのですけれども、まだ事務局として考えているのは、少

なくともウェルビーイングのコンセプトというのはどういうものなのかというのを、改めて、コラムのようなものでしょうか、整理して皆さんにお伝えをするようなことを、計画の中で設けていきたいと思っております。その上でまたコンセプト、キャッチコピーなど、分かりやすく市民にどう伝えていくのかというところは、申し訳ないのですが、まだ整理できていないのです。そこは意識しながら進めたいと思います。今はまだ骨子の段階で出来上がってないところがあり恐縮なのですが、事務局としてはそう考えております。

委員長：ありがとうございました。

G委員：「はぐくむ、ささえる」のところで、毎回この時にお金の話とか、市の予算をとかという話が出ると思います。すぐに何かできるという訳ではないと思うのですが、自主財源みたいなものが、本当は財団などどこかに、市の予算ではない財源が、少しずつつかもされないのですが、今のうちから作れるようなお財布をもって、市のアマチュアで活躍する文化団体の方に支援として回るみたいな、良い循環みたいなのが1つ目標項目としてあってもいいような気がします。

課長：取り組み方針2の「はぐくむ、ささえる」の中の、主な取り組みの2つ目ですね。「アーティスト・文化芸術団体等の支援」というところが説明してる寄付制度や、サポーター制であったり、ファンドだったり、ご意見いただいたところが、協力していただいているところですが、活動として色々な企業協賛いただきながら、行われているようなものもあります。おっしゃる通り文化芸術活動、市だけの予算ではなく、民間のご支援をいただきながら行えるところというのがありますので、またともかく市民、いろいろな立川の文化芸術を支えていきたいという思いがあるような方々の力をどう集めるかが大きな課題だという認識しております。まだそこまで至ってないところはありますけれども。

G委員：ファーレ立川アートのグッズを作られたのですよね。すごくいいなあと思っています。あいうものは立川の発信にもなるし、それほど利益は上がらないにしても、お金を稼ごうとする姿勢がいい。何かそういうものをもっといっぱい、文化の視点でも、どんどん出していてもいいような気がします。

課長：そうですね、今回ファーレ立川アートの30周年ということもございましたので、この記念のグッズを作りました。収益の一部は作品の維持修復に充てるというようなコンセプトで作っているものになります。今までファーレ立川アートのアーティストの作品そのものをグッズにしたものはありませんでした。今回、アーティストの方にコンセプトを説明してご承諾いただいた方もいらっしゃいまして、作品として著作権のところをクリアしてグッズを作っているところがあります。今仰ったとおり収益はあまり大きなものではないのですが、グッズを皆さんに手に取って見ていただくことによる、周知効果というところは大きな手ごたえを感じています。またこういう活動がいろいろなところでできると立川にある芸術をいろいろな方に、市内だけではなくて市外、また、インバウンドで来ている外国人の方などにも手に取ってもらえる機会があるかと思いますので、続けていきたいと思っている事業の1つです。

委員長：実際には人的資源と物的資源は、本当は生かすべきなのです。なかなか、文化芸術とお金という問題が何か切り離されて考えられていますけれど、実際は稼げるものは稼がなくてはいけないという発想がどこかでは必要なのです。ですから、今回みたいなグッズを作っていくというのもフェアレに限らず、そういうことが出来るものが十分あり得ると思うのです。だからそういうものも含めて、立川ならではの活動がこれを契機にできたら面白いなと思います。

H委員：私も拝見しておりまして、やっぱりその私も地域文化コーディネーター、こちらもすごく明記されているのはいい事だなと思います。これは第5次の文化振興計画だと思うのですけれども、やはり第6次・第7次というふうに繋がっていくための第5次だと考えています。すると、やはりあらゆる事業や人材とかというのは、繋がっていく事、リアルタイムに繋がるのもそうですし、今後に向けて繋げていくというようなことを考えると、これまでの事業ごと、出来事ごとでのサポートではなくて、それを1つにまとめて繋がっていく事を考えたら、絶対に欠かせない事なのかなという風に思います。それがアーツカウンシル機能の強化というところに繋がってくると思います。それとやはりそういった繋がりがちょっとないがしろになっているような場所での文化事業では、うまく繋がっていないところ、そういったプロジェクト自体の良し悪しに繋がっていくのかなと、参加者アーティストとしての参加側からしても思います。ですので、具体的にどういったことが実現可能なのか、また立川らしさというところが、どういったところで実現できるのかということを考える上で、やはりアーツカウンシル機能が生きているような自治体。例えばですけれども、規模の点などで比較対象として参考にできるようなものを、具体的に引用しながら探っていくのがすごく大切になってくるのかなと思います。そのらしさを探る上でだと思うのですが、例えばアーツカウンシル東京とあるいは地方にあるアーツカウンシルなどは、自分が両方の補助金・助成金を活用させてもらって体験した経験を元に話しますと、やはり小さい自治体は自治体なりの、コーディネーターですとか、アーツカウンシルと例えばアート関係ですとか、その後の実施者との距離の近さですとかを、すごくいい意味で感じられたりしました。また小さい予算ならではの魅力的な活動とか、これ東京にはないなあというような、そういった活動とかもいろいろ地方で目にする事が最近増えてきたと思います。何かそういった動きっていうのも実際に参考にしながらまた探っていく事ができれば、次に繋がるのかなという風に思っております。

委員長：そうですね、次に常に繋がってかないと意味がない。このことが大きいですね。ですから今回は、という事ではなく2025年度以降でもいいのですけれども、やっぱり他の地域、アーツカウンシルなどとも連携したり、あるいは参考にしたりして同じ事で一緒にできることはやってみる。そういうような事をこれから工夫としては必要なんでしょうね。

副委員長：皆さんの意見を少しいろいろ聞かせていただいて、やはりウェルビーイングが皆さんの中に響いているのかなということをすごく実感をしました。この計画は来年度出すという事ですが、目的の中にウェルビーイングという単語を入れても、使い古されたというよりは、立川早いというようなイメージをもっていただけたらと思う。例えばこういったとこ

ろにも入れてしまえば皆様が思ってるような4つの重点項目の中にもすべて生きてくるところがあるのかなというのが、1つ自分の勝手な感想として思いました。あとやはりこのアーツカウンシルと、さっきのH委員と同じような意見なのですけれども、やはりアーツカウンシルの機能と総合ディレクターですね。コーディネーターの必要性というのは、やはりいろいろな委員が言われているように、市民の方にはなかなか見えにくいというところを改善することですね。コーディネーターというのは見える化するためのブレンなのかと思うのです。もちろん、実働するのは実はそのコーディネーターではなくて、コーディネーターの下で動く人だと思うのです。例えば名誉職でも構わないんですが、アーツカウンシルの1番トップにそのコーディネーター的な役割＝アイデアを出す人を据えて、下で実際にまとめて動かしていくなんて事も少し可能なのかなと思うのです。美術館とかホールなどは結構そういった形をとっていて、館長は有名な名ばかりの人を連れきて、アイデアだけはすごく出してもらう。実際それを動かしてるのは配下の人、要するに指定管理だとか職員がやっているということがすごくあります。それがうまくいっているケースが結構あって、そうするとマップができるのです。立川市でやっている事は、文化芸術でやっている事は何なのかというマップができて、そうすると、やっぱりじゃあ自分もここに行ってみよう、となる。道しるべの地図になりますから、とてもいいのかな。それを作っていただけるのがこのコーディネーターですね。俯瞰できる存在。そういったところは、是非作っていただきたいなと思います。あとデジタルテクノロジーに関しては、やはり新しいものが出てくるというのは良いところでもあり、悩ましいところでもあります。実はアーカイブという事に関しては、学問領域として確立をされてまして、ある意味大学とかと連携をとって、そこでの実験的なアーカイブの残し方というのを、逆に資料を提供しながら向こうは向こうでそれを開発していくような、そういった何か連携をとれてもいいのかなと思います。お金をかけるばかりではなく、逆にこちらから提供してどういうふうに取れるのかっていうのが、これから有効なのかという事の連携というのも視野に入れてもいいのかなという風に思いました。そういう意味では資料3のこの「つたえる、とどける」のところの3ですね。「地域での文化活動芸術を広く発信し、その魅力をつたえる」というところもこれもきっとデジタルテクノロジーみたいなことも、ひとつ関わってくると思うのです。ここの2に「企業等との連携」となっています。ここはもう、もしかすると産官学の連携とかっていう風にしてしまうのがいいのかな、と。もうちょっと使い古された単語ではありますが、やっぱり「学」、大学も非常に地域と連携したいっていうような気持ちをすごく持ってます。さきほど、D委員も聴いていただいた9/26のイベント。あの本当に1400人ほど来てくださったというのが昨日の教授会でも出て、非常に我々としても学生にとってすごくいい経験をさせていただいたなあとというところがあります。逆に言えば本当に大いに使っていただければ嬉しいなと、思っている次第です。

委員長：今日は最終的なお話、基本がらみについてのご意見と今後の事でした。ちょっと時間は早いですが、いったんこの委員会そのものはここで終えて、時間がありますのでこの後フリ

一で、自由に何か意見を求める、あるいは出しあう、そういう時間を設けるのもいいのかなと思っています。

課長：いったん締める前に、資料「その他」のところなど説明させていただければと思います。今回いただいたご意見につきましては、また事務局で持ち帰りまして、まとめたと思います。骨子案につきましては今後庁内での調整を図った後12月議会で報告する次第になっております。委員会の次回は年明けの1月中旬頃に予定しておりますので、その場で計画素案を答申いただきます。従いまして今後メールなどでご意見をお伺いする事があるかと存じますが、引き続きよろしくお願いいたします。あとその他の報告をさせていただきます。その他のところといたしまして、お手元に配布している資料、立川市文化振興推進委員会の委員名簿をご覧いただきたいと思います。G委員でございますが、これまで立川文化芸術のまちづくり協議会企画運営委員会の代表としてご出席していただきましたが、今後は一般社団法人立川観光コンベンション協会の代表という立場からのご参加いただけることになりましたので、そちらの表記をさせていただきました。G委員におかれましては、文化芸術振興の1つの観点として、観光と連携した立場でご参加いただければと存じます。よろしくお願いいたします。また今後の開催につきましては、改めて年明け1月にご連絡いたします。

委員長：ありがとうございました。では委員会は終了といたします。

課長：ありがとうございました。